

# 「伝統の技と心」シリーズを推薦する

財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 理事長 平山郁夫



平山 郁夫

わが国では文化財の次世代への継承・発展を目的として、1950年(昭和25年)文化財保護法が施行され、伝統的に受け継がれてきた歴史上、または芸術上価値の高い芸能や工芸技術を重要無形文化財として、それぞれの分野で卓越した技や技術を有する人や団体を重要無形文化財保持者いわゆる人間国宝として認定しています。

また日本全国各地に伝えられ地域に根ざした祭などの貴重な民俗文化も重要無形民俗文化財に指定し、その保存・育成・伝承に力を注いでいます。

このたびポーラ伝統文化振興財団がこれまで制作してきたこれらの記録映画を「伝統の技と心」シリーズとしてDVD化され発売されることになりました。

日本が後世に伝えるべき伝統文化の技と心の素晴らしさを、多くの方々に鑑賞して頂くようお奨めします。

## 陶芸 呉須三味 —近藤悠三の世界—

京都の清水寺下に生まれた近藤悠三は、12歳で京都市立陶磁器試験場付属伝習所に入り、その後70年にわたる作陶人生の一步をふみ出す。19歳から22歳まで富本憲吉に師事し、陶芸家としての厳しさを教えられた。近藤の作陶生活のなかで生み出されてきた作風の変遷は、まさに彼の歩んできた人生そのものの表現にほかならない。本映画では、特に生涯の夢として描いてきた「富士山」をモチーフとした豪華華麗な境地を描く。

文部省選定・芸術祭優秀賞・優秀映画鑑賞会推薦・日本映画ペンクラブ推薦・優秀映像教材選奨最優秀作品賞・キネマ旬報ベストテン第2位

監督・演出 村山 正実 製作会社 桜映画社 1983年製作(32分)



## 染織 芭蕉布を織る女たち —連帯の手わざ—

南国の着物として古くから人々に用いられてきた芭蕉布。しかし現在では沖縄県の大宜味村喜如嘉で主に製作されるほかは、ほとんど見られなくなってしまっている。太平洋戦争を境に亡びてしまった芭蕉布の復興に、生涯をささげてきた「喜如嘉の芭蕉布工房」の平良敏子を中心に、糸芭蕉の栽培から染色、織りと一貫して共同作業で行われる製作工程を追い、製作にかかわる女性たちの思いを映し出す。

文部省選定・文化庁芸術祭優秀賞・毎日映画コンクール教育文化映画賞・日本産業映画コンクール日本産業映画賞・キネマ旬報ベストテン第3位・優秀映画鑑賞会推薦

監督・演出 村山 英治 製作会社 桜映画社 1981年製作(30分)



## 陶芸 土と炎と人と —清水卯一—のわざ—

京都五条坂の清水焼の卸問屋に生まれた清水卯一。14歳で石黒宗磨に弟子入りした彼は、自ら土を知り、釉薬を知り、炎の働きを知る、たゆまざる努力を繰り返した。昭和60年「鉄釉陶器」の技術で重要無形文化財保持者の認定を受けた清水は、素材の優れた特性をひきだし、個性的で力強い陶芸表現をさらに展開させている。大らかな自然に対する感慨や想念を反映して、限りなく深みのある黒の輝きを増していく清水卯一の鉄釉を映し出す。

文部省特別選定・文化庁芸術作品賞・教育映画祭優秀作品賞・優秀映画鑑賞会推薦・日本映画ペンクラブ推薦・優秀映像教材選奨

監督・演出 山添 哲 製作会社 プロコムジャパン 1983年製作(33分)



## 染織 彩なす首里の織物 —宮平初子—

7種の技法により織られる「首里の織物」は琉球王府の時代に王家や士族が着用した格調高い織物である。宮平初子は第二次大戦後、絶滅の危機に陥った首里織の復興を果たし、今日も第一人者として活躍している。本映画は代表的な「花織」と「手縞」(緋織)の制作工程を中心に技法を紹介するとともに、氏の卓越した技能と首里織にかける深い思いを記録し、また、独自の染色文化を育んだ沖縄の風土と歴史などを盛り込んだ作品である。

文部科学省特別選定・優秀映画鑑賞会推薦・文化庁芸術作品賞・日本映画ペンクラブ推薦・日本紹介映画ビデオコンクール奨励賞・教育映像祭最優秀賞・文部科学大臣賞・毎日映画コンクール記録映画文化賞・キネマ旬報ベストテン第4位

監督・演出 村山 正実 製作会社 桜映画社 2003年製作(40分)



## 漆芸 変幻自在 —田口善国・蒔絵の美—

重要無形文化財「蒔絵」保持者である田口善国の神技のような蒔絵技法。本映画では、「王蜂蒔絵師箱」の制作工程をたどりながら、田口独特の魂ある意匠—森羅万象へのあたたかい眼差しと観察眼に培われた意匠—を映す。自然を友として小さな生き物と優しく心通わせ、美しく大胆に表現される田口善国の装飾美と確かなわざの世界を紹介する。

文化庁優秀映画作品賞・優秀映画鑑賞会推薦・文部省選定

監督・演出 黒沢 洋一 製作会社 日経映像 1992年製作(36分)



## その他工芸 西出大三 截金の美

重要無形文化財「截金」の保持者・西出大三は古代の佛教史と王朝文学を学び、奈良や京都に足繁く通い、藤原時代の佛像や佛画を見て歩く。そして「幻の技」といわれた全盛期の截金研究に没頭し、独自の境地を開いた。古代から脈うつ美的精神の底流には、奔放で明るく、徹底した華やかさが求められてきた。截金は、日本が生んだ幾多の工芸の中でも、最もユニークな技である。

文部省選定・日本紹介映画コンクール審査員特別賞・優秀映像教材選奨優秀作品賞・優秀映画鑑賞会推薦・文化庁芸術作品賞・日本映画ペンクラブ推薦

監督・演出 山添 哲 製作会社 プロコムジャパン 1986年製作(30分)



## 民俗芸能 神々のふるさと・出雲神楽

陰暦の10月に八百万の神々が集まることから、神無月を神在月と呼ぶ出雲。佐太神社では、9月24日の夜に古伝の「御座替式」が厳粛に執り行われ、翌25日が例大祭で、「七座」「翁」「佐陀神能」が奉納される。佐陀神能の演目は十二番あるが、最も人気のある曲は「八重垣」である。この映画では、「見々久神楽」「奥飯石神楽」の「ヤマトノオロチ」を比較し、さらに新しい表現方法で人気のある石見の「有福神楽」にも視点を当て、出雲神楽の秘密を探ろうとしている。

日本産業映画・ビデオ文部科学大臣賞・優秀映像教材選奨 優秀作品賞・優秀映画鑑賞会推薦・キネマ旬報ベストテン第1位

監督・演出 松川 八洲雄 製作会社 英映画社 2003年製作(41分)



## 人形 人形作家 秋山信子 —心やすらぐ人形を—

桐壺人形の制作工程を通して、作品と心通わせる秋山信子の穏やかな表情の作品と人柄を描く。愛らしさの中に内面的な深さと芯の強さを感じさせる秋山の作品。そうした人形制作の動機は一体何なのだろうか。映画は、地元・大阪の河内長野市に伝わる獅子舞をテーマとした制作過程や、作品と心通わせる穏やかな表情を中心に展開される。技術的な制作工程はもちろんだが、彼女の人形制作にかけられる情熱、深い思いなど、人間的魅力をもよく伝えている。

文部科学省選定・優秀映画鑑賞会推薦・教育映像祭優秀賞・教育映像祭優秀作品賞・日本映画ペンクラブ推薦第2位・キネマ旬報ベストテン第3位

監督・演出 村山 正実 製作会社 桜映画社 2001年製作(38分)



## 能狂言 狂言師・三宅藤九郎

明治、大正、昭和の三代を一介の狂言師として生きてきた三宅藤九郎。兄の六世野村万蔵について人間国宝との評価を得た。「狂言は、能と芝居の丁度中間崖つづちをぎりぎり歩むもの」と語る三宅は、狂言が陽の当たることの少ない存在であったことから、狂言を能から自立させ、格を主張させるためにひたすら芸を磨きつづけた。俗なる物真似からいって、聖なる道化ぶりを演ずる狂言師、三宅藤九郎の磨き上げられた芸の世界に迫る。

文部省選定・日本映画ペンクラブ推薦・優秀映画鑑賞会推薦

監督・演出 吉田 喜重 製作会社 日経映像 1984年製作(32分)



## 民俗芸能 —琵琶湖・長浜— 曳山まつり

滋賀県長浜市に伝わる重要無形民俗文化財。200年余も続く子供狂言に取り組む町衆達を描く。寒風に舞っていた粉雪が、いつしか春風に吹かれて桜吹雪に変わるころ、この町・長浜は、賑やかなシャガリの音とともに一挙に活気づく。春の饗宴「長浜・曳山まつり」だ。まつりの中心は子ども狂言。春休みに入って、子ども達に稽古をつける若い衆の親以上の献身さに、子ども役者もよその山組には負けれないとい張り切る。エネルギーは一気に加熱、そしてまつりを迎える。

文部省選定・文化庁芸術作品賞・優秀映画鑑賞会推薦・日本映画ペンクラブ推薦・日本紹介映画コンクール金賞・優秀映像教材選奨優秀作品賞

監督・演出 松川 八洲雄 製作会社 英映画社 1985年製作(32分)

